

可能性の述語を含む文の意味・統語構造と不定詞の体の対立に関する一考察

—— 研究ノート ——

阿出川 修嘉

キーワード：モダリティ、内的・外的可能性、意味・統語構造、機能文法、意味領域

0. はじめに；問題設定、本研究の目的及び本研究ノートで提示するもの

現代ロシア語における不定詞という形態は、その統語論上の扱いについての困難さのためか、不定詞に関して正面から扱った研究は少なく¹、そのためもあってか不定詞の体のカテゴリーに関する研究というのは断片的なものが多く²、体系的な研究というのは未だ成されていないのが現状である。

不定詞をめぐる未整備のままの研究領域の一つとして、モダリティの意味と体の形式選択の呼応に関する問題が挙げられる。阿出川（2004）に始まる一連の研究の目的は、この種のモダリティの意味の中から、最も使用頻度が高い部類に入るとされる可能性のモダリティの述語を含む文における、不定詞の体のカテゴリーの文法的行動に関する記述をより精緻なものとするにある。

先行研究における問題点は、以下のようにまとめることができる：

1. 可能性の意味についての規定（理論上の立場）が曖昧のままである
 2. 意味・統語構造との関連を指摘した記述もあるが、断片的なものにとどまっている
- (ア) モダリティの述語を含む文のとりうるあらゆる文型を網羅していない
- (イ) 不定詞の動詞語彙についての考察が不十分である

本研究ノートは、上記の問題点を認識した上で、この対象をどのように分析し、意味の記述を行うかに向けた覚え書きとしての役割を持つものである。本研究ノートは、大きく分けて、前半と後半とで扱う内容が若干異なっている。

まず前半で提示される一連の作業は、大まか以下のようなものとなっている：

¹ 不定詞に関するモノグラフとして Брицын（1990）及び本稿でも取り上げる Шелякин（2006）がある。不定詞に関する統語論上の諸問題についての議論は Золотова（1982: 249-281）などで行われている。

² 体の用法に関する記述という枠組み内での不定詞についての先行研究としては、Рассудова（1982）、Forsyth（1970）などがある。

堤正典・小林潔編『ロシア語学とロシア語教育Ⅲ』神奈川大学ユーラシア研究センター，2011年，pp. 99-117.
Masanori TSUTSUMI and Kiyoshi KOBAYASHI (eds.) *Russian Linguistics and Language Education*. III.
Yokohama: The Eurasia Research Centre Kanagawa University, 2011, pp. 99-117.

- 1) 可能性のモダリティの意味を表す述語を含む文の意味構造について確認する
- 2) 可能性の意味について概観する
- 3) 意味・統語構造に応じた分類を行なう
- 4) 分類に従ってデータの整理を行なう
- 5) 可能性の意味を含む文の、想定しうる全ての構造を提示する
- 6) それぞれの構造が数量的にどの程度実際のテキストで用いられているかについて確認する

後半では、Шелякин (2006) において提案されている意味領域 (Семантическая область) と体の形態の選択についての記述を概観し、その中から可能性のモダリティに関連するものを取り上げ、考察を加える。

1. 理論的前提

1.1. 可能性のモダリティを含む文の意味構造

以下では原則として、モダリティの意味構造の基本的な枠組みとしては、ТФГ (1990) で提案されている枠組みに沿う形で論を進めることにする (cf. 1990: 123-142)。

そこでは、「可能性」のモダリティを含む文では、主要な意味要素として、①モダリティの主体 (субъект модальности), ②モダリティの対象となる状況 (предметная ситуация), ③, モダリティの対象となる状況の主体 (субъект предметной ситуации), ④モダリティの対象 (признак) となる状況の主体の持つ特徴, の四つの要素が関わっていると考えられている (cf. ТФГ 1990:123-126)。

なお, ТФГ (1990) では, これらはお互いに等価な関係にあるかのように記述されているが, これらのうち, ③及び④は, ②を構成するものであるので, 実際には以下のような階層構造で捉えるのがより適切だろう:

- ① モダリティの主体
- ② モダリティの対象となる状況
 - (ア) モダリティの対象となる状況の主体 (上記③)
 - (イ) モダリティの対象となる状況の主体の持つ特徴 (上記④)

これらが実際の文 (発話) においてどのような言語形式を伴って表されるかについて注目してみよう。典型的なケースを想定すると, ①は話者自身となるので, 通常言語形式では表されない³。②-(ア) は名詞, 代名詞類の主格 (もしくは無人称文の場合には与格)

³ ②-(ア) の主体が話者と同一である場合には, 当該言語形式で表示される (例: Я могу поднять такую тяжесть.)。

によって示され、そして②-（イ）は不定詞によって示され、この二つの要素によって、発話時点では実際に生起していない状況（＝②）が示されるということになる。

そして、当該状況が生起することの「可能性」があることについて話者が言及している（当該状況が生起する可能性があるというように話者が考えている）ということは、一連の叙想語（可能性のモダリティの意味を持つ述語；後述）によって示される。

そして、当該状況の生起可能性を否定する場合（「不可能性」を表す場合）には、否定辞（多くの場合「**не**」）と叙想語との語結合によって示される（Он **может** прийти. → Он **не может** прийти⁴）。

したがって、モダリティの意味を含む文の意味・統語構造を構成する主要な要素は以下のものになると考えられるだろう：

1. モダリティの意味要素（＝述語）
2. 「状況」を構成する要素（＝主語，不定詞）
3. 否定の意味要素（＝否定辞）

1.2. 可能性のモダリティの下位分類

次に、可能性のモダリティの意味について見てみることにしよう。ТФГ（1990）では、可能性のモダリティを「内的可能性」と「外的可能性」とに分類して提示している。ここでは両者について概観する。

1.2.1. 内的可能性

「内的可能性」とは、「当該状況を引き起こす要因となるものが、当該状況の主体そのもの、主体の内的特徴であるもの」とされている。内的な特徴としては、心理的、あるいは物理的な性質、ものの見方や確信、能力及び習慣、性格の特徴などが挙げられている（TFG 1990: 131）。

更に、ТФГ（1990）では、内的可能性を「先天的可能性」と「後天的可能性」に下位分類している。

「先天的可能性」とは、主体固有の性質や才能などが当該状況生起の条件となっているものである。

Вы добродетельны, несчастны и **не можете** отсюда уйти.

あなたは高潔で不幸だから、ここから出て行くことは出来ない。

対して、「後天的可能性」の場合には、主体の能力、習慣、知識によって当該状況が引き

⁴ 以下本文では、叙相語はボールドで示し、それと語結合を成す不定詞には下線を付する。また、否定辞（及びそれに準じる語句）はイタリックで示す。

起こされる。

Костя знал так же мало, как и все, и не мог ответить на эти вопросы.

コースチャは他の皆と同じように、余り物を知らなかったのもので、それらの質問に答えることが出来なかった。

1.2.2. 外的可能性

「外的可能性」とは、当該状況の生起を決定する要因が、主体以外、例えば、恒常的あるいは一時的な外的状況、社会的法則、自然の法則などによって条件付けられているものを指す。

この「外的可能性」は、更に「義務的可能性（*деонтическая возможность*）」と「非義務的可能性（*недеонтическая возможность*）」とに下位区分される（cf. ТФГ 1990: 132-133）。

「義務的可能性」は、社会での、法律的、通念上の規範が当該状況生起の条件となっているもの、あるいは話者自身の意志などが条件となっているものを指す：

Партком имеет право предлагать своих кандидатов.

党委員会は自らの候補を提案することが出来る。

対して、「非義務的可能性」は、社会的性質を持たない外的な状況、物事の進展の客観的法則などによって当該状況が条件付けられているものを指す：

Уже в ноябре невозможно было писать, потому что чернила замерзли во всех чернильницах.

11月で既に書き物は出来なくなっていた。というのも墨壺という墨壺のインクが凍ってしまっていたからだ。

1.2.3. 可能性のモダリティを表す述語

ここまでで可能性のモダリティの意味の下位分類について概観してきたが、本節ではこれらの意味を表しうる述語について確認しておこう。以下は ТФГ（1990）において提示されているものに、筆者の判断で *возможно*, *невозможно*, *нельзя* を加えてある：

表 1：可能性のモダリティを表す述語

内的・外的可能性	下位分類	文の統語論的分類	
		人称文	無人称文
内的可能性	先天的可能性	мочь; способен; в силах, в состоянии	—
	後天的可能性	мочь, уметь	—
外的可能性	非義務的可能性	мочь, иметь возможность	возможно, невозможно
	義務的可能性	мочь, иметь право	можно, нельзя

1.3. 意味・統語構造による分類

1.3.1. 本節の概要

本節では、可能性の意味を持つ述語文を、その意味・統語構造に応じて分類するという試みを行なう。

従来の先行研究においては、明示的ではないものの、意味・統語構造による体の選択についての記述がなされている。例えば、不可能の意味の場合には完了体が選択されるという定式化や（Рассудова 1982: 123-126 など）、あるいは、Forsyth による研究における「非常にしばしば、不可避の現象というのは一回の動作なので、完了体の動詞が不完了体の動詞よりも普通である」といった定式化（Forsyth 1970: 262-263）などが挙げられる。

しかし、これらの記述は、断片的なものに留まっており、また阿出川（2004, 2005）でも指摘されている通り、扱っている不定詞の動詞語彙などの面で問題があるため、未だ改善の余地は残されている。

そこで、まず対象の全体像を把握するために、可能性のモダリティの述語を含む文の、想定しうる全ての意味・統語構造について考慮し、それぞれの構造がどのように実際の発話で現れてきているか、またそれぞれの構造における体の選択の実態はどうなっているかについての調査を行う余地があると考えられる。

先に、モダリティの述語を含む文を構成する意味・統語的要素として、モダリティの意味を表す述語、命題を示す語（主語、不定詞）、否定辞といった意味要素を取り上げたが、以下ではそれらを便宜的に以下の略号で表すことにする：

表 2：統語的要素とその略号

統語的要素	略号（及び元にした語）
モダリティの意味を表す述語	M（=Modality）
不定詞（句）	I（=Infinitive）
否定辞	Neg.（=Negation）

モダリティの意味を持つ述語を含む文は、これらの略号の組み合わせを用いて表すと以下の四つのタイプの意味・統語構造に集約することが出来る：

- I. (M – I)
- II. [M – (Neg. – I)]
- III. [(Neg. – M) – I]
- IV. [(Neg. – M) – (Neg. – I)]

上の表記では、ハイフンは二つの記号の関係が語結合の関係にあることを示している。またそれぞれの括弧は、優先される結合（語結合）を示している。

モダリティの述語に否定辞が結合しているか否かを基準として、前者二つを「肯定構造」、後者二つの構造を「否定構造」と便宜上分類する。

以下の節で、それぞれの構造について見ていくことにする。

1.3.2. 肯定構造

肯定構造には、以下の二つが分類される。

- I. M – I
- II. [M – (Neg. – I)]

タイプ I は、「可能性」の意味を表す際の、もっとも基本的な構造である。以下のような文が分類される：

Только через демократию можно сполна включить человеческий фактор в глубокие преобразования общества, дать ему мощный импульс. (Uppsala Corpus)

民主主義を経て初めて、社会の深い変革に人間的な要素を加えることができ、社会に巨大な衝撃を与えることができる。

«Какая дура, как я могу думать о смерти, когда у меня дочь.» (Uppsala Corpus)

「なんて馬鹿な女なんだ、子どもがいるのに何だって死ぬことなんて考えられるだろう。」

タイプ II は、不定詞に否定辞が結合するケースである。次のような文が分類される：

Казалось бы, ничтожное количество, и можно было бы не обращать на них особого внимания. (Uppsala Corpus)

取るに足らない数だと思われるし、それらに特段注意を払わなくてもいいだろう。

Нейтринные «морщины» могли служить центрами гравитационной конденсации и вместе с тем не оставить «рубцов» на сохранившемся до наших дней отблеске «вселенского жара». (Uppsala Corpus)

ニュートリノの「ひだ」は、重力の凝結の中心とも成ることができたし、同時に、今日まで保持されてきている、「宇宙の熱」の反射に対して「傷跡」を残さないということも可能だった。

1.3.3. 否定構造

否定構造には、以下の二つが分類される。

III. [(Neg. – M) – I]

IV. [(Neg. – M) – (Neg. – I)]

タイプⅢは、「不可能性」を表す基本的な構造である。

Я не могу назвать требования закона «пустой фразой». (Uppsala Corpus)

その法規を「空虚なフレーズ」と呼ぶことはできない。

この構造には、述語 нельзя を含む文も該当する⁵。

Ни одному больному нельзя отказать в лечении, каким бы ни был уровень его материальной обеспеченности. (Uppsala Corpus)

その患者の物質面の保証がいかなる水準のものであったとしても、いかなる患者に対しても治療を断ることはできない。

タイプⅣは、いわゆる二重否定の構造である。

Между тем признание этого человека не могло не внушать уважения: никто ведь не

⁵ 一般に、述語 можно の否定形は нельзя であるとされており、否定辞 не と можно の結合で不可能性を表すというのは許容されない。しかし、本文以下の例で示すように、вряд ли と можно の結合は少ないながらも観察できる。

побуждал его говорить о переменах в мирозерцании. (Uppsala Corpus)

そのうちに、この人の告白は尊敬の念を起こさせざるをえなかった。というのも誰も彼に世界観の変化について話すようには促さなかったからだ。

Нельзя не учитывать того, что Троцкий и троцкисты, как это в резкой форме обнаружилось после смерти В.И. Ленина, были противниками ленинской идеи построения социализма в СССР. (Uppsala Corpus)

トロツキーとトロツキストたちが、レーニンの死後このことが急進的な形で明らかになったように、ソ連邦における社会主義の建設というレーニンの思想の反対者だったということは、考慮しないわけにはいかない。

なお、ここで否定辞として分類しているものには、「не」の他に、「вряд ли」も、否定辞に準じるものとして扱っている。例えば以下のような例が挙げられる：

Согласитесь, *вряд ли* можно считать это разорительной платой. (Uppsala Corpus)

これを破産しそうなほどの料金とみなすことは出来そうもないですね。

Во-первых, *вряд ли* можно преувеличить роль ЦРУ, других разведок, а также западной пропаганды в разжигании конфликта между Ираном и Ираком и вклад торговцев оружием, да и некоторых правительств из полутора десятков стран в поддержании огня. (Uppsala Corpus)

第一に、CIA、その他の国の諜報機関、またイランとイラクの間の紛争を焚き付けるような西側のプロパガンダの役割と、武器商人に加えて、戦争を支持している数十ヶ国のうちのいくつかの政府の貢献を、過大に評価することはできそうもない。

2. 可能性のモダリティの述語を含む文の意味構造の組み合わせ

2.1. 論理的に可能な(想定される)意味構造

ここまでの、可能性のモダリティの意味（その下位分類）と、それを表す述語、また意味・統語構造について確認した。それらを考慮した上で、論理的に想定しうる意味・統語構造としては下表のようになる。下表中で、モダリティの述語の後にコロンに続けてスモールキャピタルで「INT」、「EXT」という文字が加えてあるのは、それぞれその述語が「内的可能性」、「外的可能性」を表すものであることを示している。

表 3：論理的に可能な意味構造

	基本分類	基本分類＋可能性の下位分類
肯定構造	M – I	M: INT – I
		M: EXT – I
	[M – (Neg. – I)]	[M: INT – (Neg. – I)]
		[M: EXT – (Neg. – I)]
否定構造	[(Neg. – M) – I]	[(Neg. – M: INT) – I]
		[(Neg. – M: EXT) – I]
	[(Neg. – M) – (Neg. – I)]	[(Neg. – M: INT) – (Neg. – I)]
		[(Neg. – M: EXT) – (Neg. – I)]

2.2. 実際に観察される意味構造

2.2.1. 採用している言語データと本稿で対象とする述語について

まず，本研究で採用している言語データについて確認しておく．本研究では，一定の数量的な傾向をまず把握するという目的を設定している．そのため，コーパスの総語数が絶えず変化するモニターコーパスよりも，閉じた体系であるサンプルコーパスからのデータ収集が適当であると判断し，ウプサラコーパスからサンプルを収集している．

ウプサラコーパスから，以下に示す述語と不定詞が語結合を成しているケース全てを抽出し，必要に応じ取捨選択を行なった上で⁶，データベースを作成した．

なお，今回対象としている述語は，以下のものである：

表 4：今回対象としている述語

内的可能性	(не) уметь, (не) способен, в силах, в состоянии
外的可能性	можно, нельзя, возможно, невозможно

上で言及した，可能性の意味を表す述語のうち，ここでは叙相動詞 *мочь*, *иметь возможность* 及び *иметь право* を除外している．

叙相動詞 *мочь* を対象に加えていないのは，この述語は，上で見たように内的，外的それぞれの可能性を表しうるからであり，そのためこの述語の形式面だけではどちらの可能性を表しているかの判断がつかないためである⁷．

⁶ サンプルの取捨選択の基準については阿出川（2009: 15-16）を参照されたい．

⁷ この語それ自体は，内的可能性も外的可能性も積極的に表すことは出来ず，そのどちらでもない，「中立的（あるいは中間的）な可能性」を表していると考えられる．一方で，*мочь* は，可能性の意味を持つ述語の中でもっとも使用頻度の高い述語となっている．このことは，実際の発話においては，内的可能性と外的可能性を明確に区別して示す必要性はさして高くない，あるいはまた明確に区別することが必ずしも出来ないためにそうした言語形式が用意されており，実際に非常

また、иметь возможность 及び иметь право については、この二つは極めて分析的な言語単位であり、それ単独で述語として認めるのは別途検討が必要であると判断したため、当座分析の対象からは除外してある。

2.2.2. 実際に観察される意味構造

それでは、それぞれの意味構造がどの程度の割合で用いられているか、具体的な数字をここで確認しておこう。

表 5：実際に観察される意味・統語構造（1）

	基本分類	基本分類＋可能性の下位分類	データ数
肯定構造	M – I	M: INT – I	122
		M: EXT – I	1146
	[M – (Neg. – I)]	[M: INT – (Neg. – I)]	1
		[M: EXT – (Neg. – I)]	16
否定構造	[(Neg. – M) – I]	[(Neg. – M: INT) – I]	77
		[(Neg. – M: EXT) – I]	359
	[(Neg. – M) – (Neg. – I)]	Neg. – M:INT – Neg. – I	0
		[(Neg. – M: EXT) – (Neg. – I)]	36

2.2.3. 意味構造の分類とそれぞれの述語の内訳

上で見たデータに述語ごとの内訳と、さらにそこに結合する不定詞（「I」）の体の別もあわせて示すと以下ようになる：

に多くの場合用いられているということを示していると思われる。

表 6：実際に観察される意味・統語構造（2）

基本分類	基本分類＋可能性の下位分類		完了体	不完了体	総数
M – I	M: INT – I	уметь	8	39	47
		способен	37	29	66
		в силах	0	0	0
		в состоянии	5	4	9
	M: EXT – I	можно	861	271	1132
		нельзя	-	-	-
		возможно	12	2	14
		невозможно	-	-	-
[M – (Neg. – I)]	[M: INT – (Neg. – I)]	уметь	0	1	1
		способен	0	0	0
		в силах	0	0	0
		в состоянии	0	0	0
	[M: EXT – (Neg. – I)]	можно	2	14	16
		нельзя	-	-	-
		возможно	0	0	0
		невозможно	-	-	-
[(Neg. – M) – I]	[(Neg. – M: INT) – I]	уметь	7	28	35
		способен	3	3	6
		в силах	15	1	16
		в состоянии	18	2	20
	[(Neg. – M: EXT) – I]	можно	4	1	5
		нельзя	141	113	254
		возможно	2	1	3
		невозможно	90	7	97
[(Neg. – M) – (Neg. – I)]	[(Neg. – M: INT) – (Neg. – I)]	уметь	0	0	0
		способен	0	0	0
		в силах	0	0	0
		в состоянии	0	0	0
	[(Neg. – M: EXT) – (Neg. – I)]	можно	1	0	1
		нельзя	19	14	33
		возможно	0	0	0
		невозможно	2	0	2

このように下位区分まで考慮に入れてデータを整理すると、先行研究が主張するように、モダリティの意味と体の選択の呼応は、全体としては必ずしも強いものではないことが分かる。したがって、体の選択については何か別の要因も加味した上で再度考慮する必要があることが分かるだろう。

なお、上表中頻度数が極端に少ない、あるいは頻度数がゼロの意味・統語構造（例えば「[M: INT - (Neg. - I)]」や「[(Neg. - M: INT) - (Neg. - I)]」の場合でも、より規模の大きなコーパス（例えばロシアナショナルコーパス⁸）で検索を行うと、該当する例文を得ることができる。例えば以下のような例を参照：

Но Ельцин умеет не замечать того, чего не хочет замечать.

しかしエリツィンは気付きたくないことには気付かない、その術を身に付けていた。

Павел Николаевич умел переключаться, но к середине дня осознал, что впервые не в состоянии не думать о Марине.

パーヴェル・ニコラーエヴィチは気持ちを切り替えることができたが、その日の中頃までに、マリーナのことを考えないようなことがあり得ず、そんなことが初めてであるということに気付いた。

したがって、理論上想定しうる意味・統語構造の全てが、実際の言語使用においては認められるということになるが、上で見た二つの構造は、他の構造と比べてその頻度数が極端に少ないということは明らかであり、まれな構造であるということと言えるだろう。

3. Шелякин(2006)による意味領域の分類

3.1. 概要

本章では Шелякин (2006) において提案されている、意味領域と体の用法に関する記述を概観する。

ここで取り上げる Шелякин (2006) は、筆者の知る限り、現代ロシア語における不定詞に関するモノグラフとしては最新のものである。本書は、位置付けとして、学部生、大学院生、教師向けの教科書であると銘が打たれてはいるものの、過去の Шелякин の著書もそうであるように⁹、その内容は決して低いレベルのものではない。

Шелякин(Михаил Алексеевич; 1927-) は、基本的にはペテルブルク機能文法の立場から、

⁸ 「Национальный корпус русского языка」。ウプサラコーパスが総語数 100 万語であるのに対して、ナショナルコーパスは本稿執筆時時点で 176226551 語（2011 年 3 月）。

⁹ Шелякин (1993, 2000, 2001, 2003) などを参照。

以前より体のカテゴリー、法のカテゴリーや、モダリティのカテゴリー等に関する研究に従事して来ている研究者である¹⁰。そのため、これらのカテゴリーが交差している言語形式である、不定詞に関する本書を著すことは、筆者の研究活動においては必然的な流れだったのだろうと思われる。

Шелякин (2006) では、不定詞の形態での体のカテゴリーの用法についてまとめた記述を行なっている (2006: 115-142)¹¹。そこでは、体の用法の違いを基準にしてタイプを以下のように三分し、記述を試みている (cf. Шелякин 2006: 115) :

- ① 機能上固定されているタイプ (Функционально фиксированное употребление)
- ② 機能上対立しているタイプ (Функционально противопоставленное употребление)
- ③ 機能上同義であるタイプ (Функционально синонимичное употребление)

①の「機能上固定されているタイプ」とは、ある意味・統語環境 (意味領域) において不定詞が用いられる際に、不完了体、完了体のどちらか一方の体が用いられるようなケースである。この体の選択は、絶対的なものの場合 (常にその体を選択される) もあれば、(絶対的ではなく) 使用例上多数を占めているというだけの場合もあるとされている。

②「機能上対立しているタイプ」とは、ある意味・統語構造において不定詞が用いられる際に、体の二形態が機能的に対立しているケース、つまり体の形態に応じて表されるアスペクトの意味が異なって来る場合を指している。

そして、③の「機能上同義であるタイプ」というのは、ある統語構造において不定詞が用いられる際に、体の二形態が、相互に入れ替えが可能であるケース、つまり体の形態のどちらを選択しても意味的な差異が生じない場合¹²を指している。

そして、これらのタイプは、様々な語彙的手段や統語的手段によって表される一定の意味領域 (семантическая область) に応じて顕れてくるとされ、Шелякин (2006) では、合計で 30 の意味領域を設定している。30 の内訳は、その体の用法のタイプに応じて、以下のようになっている :

¹⁰ Шелякин (1983, 1990) などを参照。

¹¹ Шелякин (2006) における、この箇所の記述は、その後出版された Шелякин (2007) でもほぼ同じ形で再録されている (2007: 202-226)。

¹² いわゆる「体の競合」という現象であると考えられる。

表 7：不定詞の用法のタイプと 30 の意味領域の内訳

不定詞の用法のタイプ		意味領域の数
機能上固定されているタイプ	不完了体に固定されている	12
	完了体に固定されている	7
機能上対立しているタイプ		5
機能上同義であるタイプ		6

全体的な内容としては、体の研究に関する従来の研究において断片的に述べられていた内容を、意味領域という基準を新たに設定して、機能文法の立場から再整理を行なうという試みであるとみなすことができる。

以下では、30 の意味領域全てを扱うことはせず、本稿の対象である「可能性・不可能性」に関する意味領域のみを取り上げて概観してみることにする。

3.2. 「可能性」に関する意味領域

Шелякин (2006) の提案する 30 の意味領域のうち、可能性・不可能性に関する意味領域は以下の 5 つとなっている。なお、ここでは便宜上、Шелякин (2006) 内で扱われている順番で通し番号を振ってある。

① 動作の潜在的・恒常的实现

(Семантическая область потенциально-постоянного осуществления действия)

② 対象の客観的性質あるいは諸々の条件による、動作実現の恒常的可能性・不可能性

(Семантическая область постоянной возможности (можно) / невозможности (нельзя) осуществления действия, обусловленной объективными свойствами предмета или условиями)

③ 全一的動作実現の主観的可能性・不可能性

(Семантическая область субъективной возможности / невозможности осуществить целостное действие)

④ 動作実現の客観的可能性

(Семантическая область объективной возможности осуществления действия)

⑤ 主体の動作実現の能力

(Семантическая область способности / неспособности субъекта осуществлять действие)

上記①の「動作の潜在的・恒常的な実現」(Шелякин 2006: 118) の意味領域では、体の使用は不完了体に固定されている。уметь と мочь の述語の例 (Он умеет / может плавать.)

が挙げられている。

つまりここで表されている可能性は、上述の内的可能性（後天的可能性；1.2.1.を参照）であるということになる。

なお、уметь と мочь が、異なる意味で用いられる場合（быть в состоянии, быть способным の意味の場合）にはどちらの体も許容される（つまり下記⑤のタイプになる）。

また、述語 мочь については、「質的特徴付けの意味（качественно-характеризующее значение）」の場合に、主体の持続的動作を実現する能力を表す際に、不完了体が用いられるとしている。この場合には下の②のタイプにあたる。

②の「対象の客観的性質あるいは諸々の条件による、動作実現の恒常的可能性・不可能性」の意味領域（Шелякин 2006: 121）も、その体の使用は不完了体に固定されている。

ここでは述語 мочь（Человек может успешно работать в космосе.）, можно（И такая пыль стояла над степью, что можно было не мигая смотреть на солнце.）, нельзя（Эту рыбу нельзя есть без обработки.）の例が挙げられている。

これらは、上述の外的可能性（義務的可能性；1.2.2.を参照）にあたると考えられる。

ここで Шелякин は、従来の体の研究の記述等では区別して扱われてきた禁止と不可能についての議論は行っていない。これは、両者は言語形式としては本質的に不可能のみを表しており、文の意味としての差異はないと考えているためであると思われる。事実両者の意味は明確には区別できず、発話の状況等によってはどちらの意味とも解釈できることも多い。したがって、これはむしろ文の意味ではなく、発話の意味として扱う方が適切だろうと思われる。

③の「全一的動作実現の主観的可能性・不可能性」の意味領域（Шелякин 2006: 131）では、完了体の使用に固定されている。

ここでは、述語 мочь との結合の場合の例と（Ты можешь это сделать? Никак не могу заснуть.）, 否定の場合の不定詞文、述語 нельзя 及び невозможно（Здесь не пройти; Здесь нельзя пройти; Здесь невозможно пройти.）。

しかしながら、ここで Шелякин は完了体の使用が絶対的なものであるとは言っておらず、不可能の場合には、不完了体が用いられる例も挙げている（Я не мог его дождаться. Я не мог его дождаться.）。この場合、不完了体は主体それ自身には関係のない要因によって当該動作を実現できないということを表しているとしている（Шелякин 2006: 132）。

上で見てきた外的可能性の意味を持つ述語と対照してこの意味領域について見てみると、上記述語のうち、外的可能性の義務的可能性と非義務的可能性の双方の述語が対象とされている。ここで上の分類とこの意味領域の分類とで齟齬が出ていることが分かる。これについては今後考察を深めていく必要があるだろう。

④の「動作実現の客観的可能性」の意味領域（Шелякин 2006: 136）は、体の使用に際して対立があるタイプの意味領域である。この、体の対立があるタイプの意味領域で

Шелякин が念頭に置いている意味的対立は、具体的事実の意味と無制限・持続の意味である¹³。

ここでは、述語 *мочь, можно, иметь право* などが扱われている (*Вы можете взять / брать книги домой.*)。これらは、上述の述語の分類に従えば、外的可能性にあたると考えられる。

⑤の、「主体の動作実現の能力」の意味領域 (Шелякин 2006: 141) では、体の形態は同義的に用いられる。

ここでは、*мочь* (*Я не могу поднимать / поднять тяжелый вес.*)、*уметь* (*Она умеет находить / найти выход из положения, делать / сделать все как следует.*)、及び *способный* (*Эта балка способна выдерживать / выдержать большое давление.*) が、この意味領域を示す語彙的指標として取り上げられている¹⁴。

これらは、上述の内的可能性 (先天的可能性) にあたるものであると考えられる。

3.3. まとめ

以上をまとめると下表のようになる：

表 8：意味領域と体の使用の関係

	不完了体	完了体	可能性の種類	備考
意味領域①	○	×	内的可能性 (後天的可能性)	不完了体に固定
意味領域②	○	×	外的可能性 (義務的可能性)	不完了体に固定
意味領域③	×	○	外的可能性 (下位分類については要検討)	完了体に固定
意味領域④	○	○	外的可能性 (下位分類については要検討)	体の機能上の対立がある
意味領域⑤	○	○	内的可能性 (先天的可能性)	体の形態が同義的に用いられる

体の使用に基準を切り替えてまとめ直すと下表のようになる：

¹³ Шелякин (2006) では、このタイプを、「Противопоставленное употребление видовых форм инфинитива в конкретно-фактическом и неограниченно-продолжительном значениях」と名付けている (2006: 133)。そのため、ここでは完了体の具体的事実の意味と不完了体の無制限・持続の意味との対立が念頭に置かれていると判断できる。

¹⁴ ここで Шелякин は、述語から派生した名詞である *способность* についても言及している。述語と、そこから派生した名詞のそれぞれと結合する不定詞の文法的行動についての観察及び分析の試みとしては、阿出川 (2009) を参照。

表 9：体の使用と意味領域の関係

用いられる体の形式	意味領域				
	①	②	③	④	⑤
不完了体	○	○	×	○	○
完了体	×	×	○	○	○

したがって、可能性・不可能性の意味を含む述語が用いられている文において、結合する不定詞の体の形式が、不完了体が選択されている場合には、四つの意味領域がその背後にあり、完了体が選択されている場合には三つの意味領域がその背後にあるということになる。また、その際、体の意味の対立があるのは、ひとつの意味領域においてのみである。

4. 今後の課題として

このように、単純に「可能性・不可能性」だけを取り上げてみても、意味分析を試みようと思うとかように複雑な意味関係にあることが分かる。

本稿で触れなかった点としては、動詞語彙のタイプを基準にした場合についての記述が挙げられるだろう。阿出川（2004, 2005）などで既に断片的に明らかになっている通り、特定の動詞語彙においては、体の形式の選択について特徴的な選択のされ方（すなわち、意味・統語構造や述語の種類に関わらず、ほとんど常に一定の体の形式が選択される）をするものがあるが、このことをどう理論的に解釈するかが今後の課題となる。

これは、いわゆる動詞（動詞句）の語彙的アスペクトの意味特徴（いわゆる Vendler の言うところのものとは必ずしも同一ではないので別の術語を採用した方がいいだろうと思われるがここでは便宜的にこう呼ぶ）が、体の形式選択に際して、他の意味要素よりも優先されていると考えられる言語形式の見せる振る舞いである。

意味・統語構造、それを構成する述語の意味、述語と結合する不定詞の体の意味、その不定詞の語彙的アスペクト、そのうちのどれが前面に意識されているかに応じて、体の形式の現れ方が異なってくる。それぞれの形式、そしてその形式の背後にある意味の、相互の「力関係」についての記述は未だ不十分なままである。こうした実態をどのように記述するかが今後の課題となる。

また、「体の意味」と言った場合に、どのレベルまで「意味」に含め記述するかという点には留意する必要があるだろう。例えば、「Уже 8 часов – надо (пора) вставить / встать.」(Шелякин 2006: 138) といった例文を扱う場合に、Шелякин は双方の体の形態を同義的と考えている（「機能上同義であるタイプ」として扱っている）が、Рассудова はこの場合の不完了体が表す、「動作への着手（приступ к действию）」といった「意味」を、不完了体の「意味」として記述している（Рассудова 1982: 99-102）。

こうした、体という文法的カテゴリーの表す「意味」を、どのような「意味」として考

えるかという点は、文の意味と発話の意味とを峻別するのと同様に、慎重に扱われるべき事柄であろう。

文献

- Брицын В.М. 1990. *Синтаксис и семантика инфинитива в современном русском языке*. Киев : Наукова думка.
- Золотова Г.А. 1982. *Коммуникативные аспекты русского синтаксиса*. Москва : Наука.
- Рассудова О.П. 1982. *Употребление видов глагола в современном русском языке*. Москва : Русский язык., 1982.
- Шелякин М.А. 1983. *Категория вида и способы действия русского глагола*. Таллин.
- Шелякин М.А. 1990. «Модально-аспектуальные связи» in *Теория функциональной грамматики. Темпоральность. Модальность*. Ленинград : Наука., 110-122.
- Шелякин М.А. 1993. *Справочник по русской грамматике*. Москва : Русский язык.
- Шелякин М.А. 2000. *Справочник по русской грамматике*. Москва : Русский язык. [Шелякин 1993 の改訂新版]
- Шелякин М.А. 2001. *Функциональная грамматика русского языка*. Москва : Русский язык.
- Шелякин М.А. 2003. *Справочник по русской грамматике. 3-е издание, стереотипное*. Москва : Русский язык. [Шелякин 2000 のリプリント版]
- Шелякин М.А. 2006. *Русский инфинитив (морфология и функции). Учебное пособие*. Москва : Флинта ; Наука.
- Шелякин М.А. 2007. *Категория аспектуальности русского глагола*, Москва : URSS ; ЛКИ.
- Forsyth, J. 1970. *A Grammar of Aspect Usage and meaning in the Russian verb*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 阿出川修嘉. 2004. 「「не мочь не+不定形」という構文における動詞語彙及びその体の研究——既存コーパスのデータを利用した一考察——」, 『ロシア語研究会「木二会」年報ロシア語研究』第 17 号, pp. 35-58.
- 阿出川修嘉. 2005. 「「不可能性」のモダリティの意味と動詞の体の形態との相関関係に関する一考察」, 『東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」言語情報学研究報告 7, コーパス言語学における語彙と文法』, pp. 191-209.
- 阿出川修嘉. 2009. 「可能性の意味を含む名詞と語結合を成す不定詞の体のカテゴリーに関する一考察」, 『東京外国語大学グローバル COE 研究報告集, コーパスに基づく言語学教育研究報告 1 : コーパスを用いた言語研究の可能性』, pp. 1-24.

可能性の述語を含む文の意味・統語構造と不定詞の体の対立に関する一考察

—— 研究ノート ——

阿出川 修嘉

本稿は、ロシア語不定詞をめぐる未整備のままの研究領域の一つとして残る、モダリティの意味と体の形式選択の呼応に関する問題解決の端緒となるものである。筆者の一連の研究の目的は、この種のモダリティの意味の中から、最も使用頻度が高い部類に入ると思われる可能性のモダリティの述語を含む文における、不定詞の体のカテゴリーの文法的行動に関する記述をより精緻なものとするにある。

現代ロシア語における不定詞という形態は、その統語論上の扱いについての困難さのためもあり、不定詞に関しての研究は少なく、不定詞の体のカテゴリーに関する研究というのは断片的なものが多く、体系的な研究というのは未だ成されていないのが現状である。